

マラウイのエイズ孤児支援

富士の吉原商の生徒ら

現地の子ら製作
ブレスレット販売

富士市立吉原商高の生徒が同市吉原商店街で運営するチャレンジショップ「吉商本舗」が発展途上国の民芸品などを販売し、その利益を現地の生活向上などに役立てる「フェアトレード」に乗り出す。高校生運営のチャレンジショップがフェアトレードを行うのは全国でも極めて珍しい。生徒らはアフリカ・マラウイの子供が作ったブレスレットを販売することで、エイズ孤児の支援を進める。



「吉商本舗」がフェアトレード

フェアトレードは「吉商本舗」の顧問・若園耕平教諭が八月、青年海外協力隊(JICA)の教師海外研修に参加したことを契機に動き始めた。若園教諭が訪れたマラウイ。「何かで役に立ちたい。そんな思いを抱い

マラウイの子供たちが作ったビーズのブレスレット。吉商本舗で販売し、エイズ孤児の支援に充てる

＝富士市立吉原商高



マラウイの子供たちと写真に納まる若園教諭(最後列中)。中にはエイズで親が死亡し、学費や生活費に困る子供も多い＝マラウイ



いた。感銘を受けた若園教諭は「店で売らせてほしい」とその場でフェアトレードを決意した。フェアトレードやマラウイの現状について知るC.Aの協力で最小限に抑え、生徒の意識、表情は次第に変わった。「マラウイのことを伝え、自分の生活を直してもらうきっかけにしたい」。百五十円をマラウイに送る。残りのお金は吉商本舗で積み立てる計画で、「エイズ孤児支援センター」の設立に必要と同等の同校文化祭や、市内の中学校などで発表するため、毎日放課後に準備を進めている。

組合員らの手で手際よく摘み取られる秋冷茶の生葉。15日午前8時半ごろ、島田市菊川



【資料 2】 実践シート

実践場所	吉原商店街チャレンジショップ「吉商本舗」	実践者	若園 耕平
対 象	☐ 小学生(年) ☐ 中学生(年) ☒ 高校生(1～3年) ☐ 一般()		
時間数	部活動として毎日継続		
担当教科	商業科	実践教科	部活動(商業ビジネス部)
ねらい	マラウィの貧困・エイズ等の問題を知り、フェアトレードを通して国際協力を実践する。途上国に関心を持ち、一人ひとりが国際協力を考える。		
実践内容	回	プログラム	備 考
		商業ビジネス部は吉原商店街に常設店舗「吉商本舗」を運営している。マラウィのエイズ孤児を支援する目的で、マラウィ商品のフェアトレードに取り組んだ。売り上げは、エイズ孤児達の給食費や学費となり、販売利益は HTC センター建設を目指して積み立てることにした。 「知る」 ・マラウィの現状を知る 吉原商業高校文化祭「南稜祭」の発表に向けてマラウィの様子、写真、手紙、ビデオ等をとおして、マラウィの貧困やエイズについて知る。エイズ支援の人たちの活動や思いを知る。 「考える」 ・自分たちにできる支援の形を考える 自分たちの恵まれた生活を問い直す。 「店舗」を使ってできる支援＝フェアトレードを考える。 「行動する」 ・国際協力を実践する マラウィの様子やエイズの実態などを、写真や模造紙を使って展示発表する。 文化祭でのマラウィの展示、プレスレット等の販売。 文化祭翌日から吉商本舗で継続的に販売し、利益を「HTC センター建設基金」として積み立てる。	ビデオ「エイズとたたかう子どもたち」 (フジテレビ) マラウィ写真 マラウィ青年海外協力隊員・尾崎さんからの手紙 吉商本舗「マラウィエイズ孤児支援プロジェクト」 マラウィ BOX
成 果	自分たちにできる支援を考え、行動することができた。吉商本舗のマラウィエイズ孤児支援の活動がいろいろなところで話題になり、支援の輪を拡大することができた。生徒達も海外に興味をもち、ベトナムなど、他の地域にもフェアトレードが広がりつつある。		
課 題	部としてはフェアトレードを行うことで国際協力に取り組むことができたが、意識としては、まだまだ個人差があるように思われる。自分たちの活動がマラウィの子どもたちにどのように役に立っているのかを知り、自分たちの言葉でほかの人たちに伝えられるようにしたい。		

【資料3】尾崎隊員からのメール（原文のまま）

マラウィでは大変お世話になりました。

先生方からは、多くのことを学び勇気づけられました。

本当にありがとうございます。日本でも世界のことにそして他者に対しての目を向け、自分達の力で何が出来るかさぐり、活動している学生がいることは、成果の見えにくい援助活動をしている我々にとって大変うれしいことです。

先生の活動には本当に頭が下がります。

きっとすばらしい生徒達が育っていることでしょう。

さて、先日電話させていただいた孤児支援センターの件なのですが、総費用は建設に必要なレンガ等は自分達で作成コストを落とした上で約20万円だとのことでした。

具体的な建設内容ですが会議室を兼ねた孤児支援室1室、事務所3室（収納庫を含む）VCTセンター1室、合計5室を予定しています。

自分達のオフィスを持っていない彼らにとっては自分達のオフィスを持ち活動することは大きな夢です。と同時にオフィスがないと活動が出来ないという事実です。今は月々300クワチャ（300円）の部屋をかりて活動しているけれども資金不足のため10ヶ月間支払いできていない状態が続いています……。というのも資金の調達先は、プレスレットの製作販売とメンバーからの寄付金のみであり他からの資金援助は一切ありません。

プレスレットの売上金は、現在両親を亡くした子供達の学費のサポートに全て使用しており他の活動への支援までは全くまかなえている状態ではありません。

自分の生活の維持も難しいカックメンバーがなぜ無利益での活動ができるのか疑問でした。あるとき私の同僚が「私も父親をエイズで亡くした孤児だ。だから彼らの悲しみや苦労がよく理解できる。そしてこの悲しみや苦労を今の子供達させてはいけない。多くのカックメンバーがなんらかの形で、エイズで家族を失っているんだ。そして少しでも自分達でエイズの悲しみを減らすことができるならと考えている。」と語ってくれました。

私もそれを聞いて2年間で私が力になれることがあればと日々模索しております。

吉商本舗の生徒さんそして日本の皆さんに少しでもこの思いが届けはありがたいなと思っています。

【資料4】南稜祭の様子



南稜祭展示

マラウィの写真や自分たちで調べたこと
ブレスレット販売も行った



教師海外研修で集めた

「マラウィ BOX」

JICA 中部から借入れ



この日に合わせてポスターも作成



店舗会議において

南稜祭の出店について話し合う

アフリカ・マラウイのエイズ対策支援



マラウイと通信し、贈呈式を行った若園教諭（左から2人目）と生徒ら—名古屋市のJICA中部



フェアトレードの収益金や、市民からの寄付金で建設資金を集めた。同センターは六月末に完成する予定で、国民の14%がエイズに感染している同国のエイズ対策に一役

民芸品販売で資金

6月末完成

「吉商本舗」が検査センター

富士市立吉原商高生が同市吉原商店街で運営するチャレンジショップ「吉商本舗」の力で、アフリカ・マラウイに「自発的カウンセリングHIV検査（VCT）センター」が設立されることになった。

吉商本舗がマラウイの支援を開始したのは平成十八年九月。顧問の若園耕平教諭がJICAの青年海外協力隊の研修で同国を訪れたことがきっかけだった。エイズで年間八万人以上が命を落としている同国。親が死に、生活費もままならない子供も多い。この現状を目の当たりにした若園教諭は、現地の子供が作った民芸品を販売し、利益を生活向上に役立ててもらい、「フェアトレード」を思い立った。生徒らはビーズアクセサリーなどを吉商本舗で販売し、原価を現地に送金。利益は積み立てて建設資金に充てた。目標は若千足りなかったが、文化祭などで同国について紹介したこともあり、活動に賛同した市民から善意が寄せられ、二十万円に到達した。同センターは感染予防や二次感染を防ぐため、エイズ検査やカウンセリングなど無料で受けられる施設。県病院の前に建設され、現地ボランティアの手で運営されることになった。エイズについて学びたいという子供が多く、重要性を認識されながらも、資金不足で建設できなかったため、JICAマラウイ事務所（長（三年）は「多くの子供の諸永浩之次長も「日本の多くの人がエイズに関心を持ち、協力してくれた。子供たちも喜んで」と感謝する。生徒らはこのほど、名古屋市のJICA中部でテレビ会議システムを利用して現地と通信し、贈呈式を行った。現地の子供からは「ありがとう」と感謝の言葉を受け、歌のプレゼントもされた。吉商本舗の杉森理美部長（三年）は「多くの子供を救い、マラウイに笑顔が増えてほしい」と期待を込める。吉商本舗は今後もフェアトレードを続け、同センターの維持費を集める計画だ。

総合

▽米国が対日制裁 米国は日本が日米半導体協定に違反したとして、パソコンなど3品目に100%の関税を課すとの制裁措置を発表した。協定は日本での外国製半導体の参入拡大などを取り決めていた。日本は関税貿易一般協定（ガット）違反とガットに提訴（昭和62年 1987年）

歴史ごよみ

4月17日

▽ブノンペン陥落 カンボジアの共産党勢力が首都プノンペンを陥落させ、米国の支援を受けていたロン・ノル政権は崩壊した。5年に及ぶ内戦は終結したが、翌年4月、ポル・ポト書記が民主カンボジア政府の首相に就任し、国民の大虐殺が始まった（1975年）

「吉商本舗」の方々へ

H19, 2, 9

駒ヶ根市立 赤穂東小学校

6年1組 代表

私達は5年生の時、「世界がもし100人の村だったら」や愛知万博のフランス館での映像を見てしょうげきを受け、貧しい人々への援助活動を始めました。

貧しい人々に服を送るため、私達はアルミカン集めをしてこの2年間で約10万円ものお金を送料として使わせてもらいました。今はクラスに3万円あり、今回先生から吉商本舗の方々が「VCTセンター」をマラウイに後少しで作れるということを聞いて、クラスで5000円を寄付することを決めました。私はこの建物のつみたてに自分達の集めたアルミカンが使われていくのをうれしく思います。エイズやエイズこじでたくさんの人々が苦しんでいる中で、この建物により少しでも苦しみが少なくなったり希望になったりすれば、私にとってはとてもうれしいことです。

そしてアルミカンを出して下さった地域の方々は、顔の見えない外国の人の幸せのためにたくさんためていていただいて、世界が一つになるのはこういうことからなのかなあ、と感じました。

私はビデオを見ていつも思うのは、貧しい人々の笑顔は私には出来ない笑顔だなあ、ということです。そんな大切な笑顔が3秒に1つずつ命と共に消えていきます。そんな命を見ようともせずそのままにしていく先進国の人達。私は消えていく命をもっと見て上げて欲しいと思います。

私達はあと2ヶ月で卒業ですが、それまでできることをやりたいし、卒業しても、この現状は変わるものではないので、ずっとこの活動を続けていきたいと思っています。

私達はこれからも活動がんばるので、みなさんもがんばって下さい。

御礼状

赤穂東小学校 6年1組のみなさんへ

今回、マラウイVCTセンター建設の支援金を寄付してくださりありがとうございます。

この支援金は、私達吉商本舗が責任を持って管理し、マラウイにVCTセンターを建てるために使いたいと思います。

私達はマラウイで少しでも多くの人を救いたいと思っています。しかし、吉商本舗でのマラウイ商品の売り上げだけではどうしても、私達が部活を引退するまでにVCTセンターを建てる事ができません。そのため、今回赤穂東小学校のみなさんが支援金を寄付してくださると聞き、とても嬉しく思っています。自分達の行ってきた活動の証として建てたい。今すぐにでもマラウイで苦しんでいる人達を助けたい。そう思ってこれまで活動してきました。その結果、みなさんを含めたくさんの方々からの協力を得て、今年3月にマラウイにVCTセンターを建てる事が決まりました。これまでこの活動をやってきた成果が今こうして実現することを本当に部員一同嬉しく思います。

今こうしている間にもマラウイでは多くの人々が亡くなっています。一日に子供からお年寄りまで何人も人が亡くなっている現状。私達の住んでいる日本とは全く異なった世界。みなさんも今回のことから、私達が無気なく過ごしている一日一日がどれだけ幸せで平和か少しでも考えてもらえたら嬉しいです。今のマラウイにはどうしてもVCTセンターが必要です。今回の支援金・売り上げを使いVCTセンターが建つということになりマラウイでも多くの人々が助かると思います。本当にありがとうございました。

【資料7】 HTC センター建設写真



4月11日 建設予定地に杭を打つ



5月14日 家の形になってきた



4月14日 ボランティアメンバー基礎工事



5月29日 早くも外装は完成



4月25日 材料搬入



6月25日 完成まであとわずか



5月7日 壁ができてあがってきた



6月29日 明日のセレモニーを待つのみ

【資料8】 オープニングセレモニーの様子



準備をする高校生（HTC→HCT はご愛敬）



完成した HTC センター



よさこいを踊る地元の人たち



セレモニーでスピーチする諸永次長

【資料9】 商業ビジネス部からのメッセージ

メッセージ

VCT センター完成たいへんにおめでとうございます。日本では、この VCT センターがルウェレジに完成する日を待ち望んでいる人たちがたくさんいます。毎日たいへんな作業だったと思いますが、建設にたずさわった方々に心からお礼を申し上げます。

また、尾崎さんをはじめ JICA の関係者の皆様には、私たちの思いをマラウイに届けていただいたことに感謝いたします。この VCT センターを、大好きなマラウイと日本の友情の証としていつまでも大切にしてください。いつの日かマラウイに、ルウェレジに行くことを楽しみにしています。ありがとうございました。

吉原商業高等学校 商業ビジネス部一同

**SPEECH BY THE DEPUTY RESIDENT REPRESENTATIVE AT
THE LAUNCHING CEREMONY OF VOLUNTARY COUNSELING AND
TESTING CAMPAIGN AT LUWEREZI HEALTH CENTRE ON
SATURDAY 30TH JUNE, 2007.**

The Chairman for Luwerezi Community Aids Committee

The Officer in Charge for Luwerezi Health Centre

Invited Guests

Ladies and Gentlemen,

It is a great pleasure and honour for me to be here at Luwerezi Health Centre this morning to attend the launching ceremony for Voluntary Counseling and Testing Campaign. It has pleased me most to note that your humble beginning and through concerted efforts and collaboration has indeed culminated in this great achievement which will go along way in assisting and addressing health issues among the communities around. In this regard therefore, I would like to acknowledge and congratulate the entire Luwerezi Community especially Miss Hitomi Ozaki for initiating income generating activities within the community.

Most of you will recall that in August last year, a group of Japanese teachers whose ideals are to promote international understanding, visited Malawi and were accorded the opportunity to tour this place and to learn some of the IGA products undertaken here. The group was highly impressed with the IGA products and consequently took these products to Japan where they were sold in students' shops. A newspaper coverage on the ideals of the IGA products was carried in Japan and some people who read about it generously made contributions which added to the profits to fund the VCT.

I would like to appreciate and commend in a special way the dedication that Miss Hitomi Ozaki has demonstrated in her work. It is the consequence of this aspect of working together between Malawi and Japan that students back in Japan have learned about Malawi and have worked to support her. It has been the will of the people of Malawi to mobilize financial and human resources in order to realize this achievement. Indeed I am once again overwhelmed and thank each one of you.

Finally on behalf of JICA Malawi Office and indeed on my own behalf, I would like to thank you for the support that you have rendered to Miss Hitomi Ozaki over the period that she has been here. She will be returning to Japan soon. Her successor Miss Kanako Tanaka will be coming to work with you shortly and it is my sincere hope that she will continue with the good work that her predecessor has left. It is JICA's commitment to work with the communities in every way possible especially in programs that focus on providing basic human needs.

YEO CHOMENE..

【資料 1 1】TV 会議 写真と新聞記事



TV 会議の様子を伝える
静岡新聞朝刊 2007 年 7 月 4 日付

【資料 1 2】尾崎さん、諸永次長と生徒たち



吉商本舗 若園様

マラウイ・ルウェレジHIV/AIDS活動報告

青年海外協力隊エイズ対策 任地：ルウェレジ田中加奈子

◎HTCセンターについて

2007年6月30日に開始したマラウイ・ルウェレジのHTCセンターサービスも早いものでもうすぐ2年が過ぎようとしています。吉商本舗の皆様、また寄付金を下さった多くの方々の助けがあってこそ、ここまで続けられているのだとメンバー共々日々感謝しております。

2007年6月30日から2009年4月末までにHTCセンターを訪れた住民の数は合計4421人。そのうち170人がHIVポジティブだということが確認されました。ルウェレジの人口が約2万人、そのうち約4500人がHTCセンターを訪れたことになります。2年たった現在でも一日平均およそ15～20人ものクライアントの皆様が訪れています。訪れる人たちの年齢層も幅広く、若者から40代、50代の男性や女性の方も訪れます。またこのHTCセンターが病院内に隣接されていることから、妊婦さんがもっとも多いクライアントさんです。妊婦さんのHTC検査は県で義務づけられており、病院に診察しにきたお母さん達は自動的にHTCセンターに検査をうけにいかねばなりません。しかし2年前、ルウェレジにこのセンターがない時は、これさえも遠く離れた県病院に行くことになっており、金銭的な問題からそんなことは到底できない村のお母さん達は自分のステイタスをしらないまま子供を産むということが当たり前でした。それが今は自分たちの住む地域のセンターで検査が出来ます。これは本当にすごい進歩だと感じています。

このように2年たった現在でも継続して行えているHTCセンターなのですが、たびたび検査キットが不足し、HTCサービスそもそもが行えない状況が多々あります。このように検査キットがない時期は平均して3ヶ月に一度は起こり、検査キットがない場合は当たり前ですが、センターを開けることができず、遠く離れた村からわざわざ訪れてくれたクライアントさんも、検査ができず不安を抱えたまま肩を落として帰らねばなりません。またHTCセンターにいる2名のカウンセラーも相変わらずボランティアとして給料も貰わず活動を続けています。彼らにも本来の自分たちの仕事があるので、雨期など農作業の忙しい時期はどうしても本業に力をいれなければいけず、泣く泣くセンターを閉めることがあります。このような問題を解決していくことはとても難しく、現在まで県病院に対して、カウンセラーの給料を少しでも支給することが出来ないのか？また検査キットを効率良くローカル地域であるルウェレジに配布することができないのか？など話し合いをしてきましたが、未だもって解決できていない状況です。そんな中でLUCACメンバーであるカウンセラー達は自分たちの出来る限り、HTCセンターを運営し地域住民のために一生懸命に働いています。私の任期も残りわずかになってしまいましたが、彼らのためにも出来る限りのことをしていかなばと日々考え、悩み続けています。



写真：現在のHTCセンター



カウンセラー：ケファス・ズゴーブ氏



写真：カウンセリングをするケファス氏 カウンセラー／ルング・レナード氏

【資料14】活動の広がり



「香陵祭」での販売の様子
(沼津東高校提供)



マラウィブレスレット販売の様子
(高知大学 提供)



ベトナムのフェアトレード商品と
販売体験の様子を伝える新聞記事

【資料14】吉商本舗の飴「よっぷ」マラウィ紅茶味



私たちはマラウイのエイズ孤児を支援しています

～店舗販売の部活動におけるフェアトレードの実践～



富士市立吉原商業高等学校

若園耕平

1. はじめに

2006年夏、教師海外研修で訪れたマラウィ共和国。ルウェレジという片田舎で出会った一青年海外協力隊員との出会いから、商業高校生の運営するチャレンジショップでフェアトレードが始まり、エイズ孤児たちを支援するだけでなく、ルウェレジの地にエイズの検査とカウンセリングを行う「HTC センター」が建設することができた。また、Jica-netを通して、現地の高校生と交流することができ、マラウィを身近に感じた。一隊員と一部活動から始まった支援も、隊員は現在3代目が赴任して継続している。2006年、高校生だった生徒たちは卒業し、今の部員たちは全員当時を知らない世代である。ブレスレットも大学や他の高校で販売されるなど、フェアトレードは現在も行われている。2006年から現在まで続いている、部活動におけるマラウィ支援の実践を紹介する。

2. フェアトレード開始

心を打つ授業だった。ルウェレジ中等学校で参観させていただいた尾崎隊員の授業。現地の言葉は分からないが、真剣に生徒たちに語りかけている。生徒たちも全身でその言葉を受けとめている。人工中絶についての授業であることは聞いていた。やめたくなくても妊娠してしまうと学校をやめざるを得ない。そのためお金のかからない方法で、安易に中絶をする生徒たち。生徒自身の命に関わること。何とかそれを食い止めたい。尾崎さんの強い決意を感じ、素晴らしい授業に感動させられた。尾崎さんは学校の先生ではなく、エイズ対策の協力隊員としてこの地に赴任している。地元のボランティア（ルウェレジカック）のメンバーと、エイズの被害を食い止めるための活動を行っている。中等学校でも、親がエイズで亡くなると学校を中退しなくてはならない。そんな生徒たちのために、放課後みんなでビーズのブレスレットを作り、販売している。売上はエイズ孤児たちの授業料になるとのことだった。私はその話を聞いて、すぐに日本にある私たちのチャレンジショップでの販売を申し出た。帰国して生徒たちに相談しなくてはならなかったが、チャレンジショップを始めた目的を考えれば必ず生徒たちは賛成してくれると思った。

3. チャレンジショップ「吉商本舗」

2004年7月、販売実習を行う部活動「商業ビジネス部」は、吉原商店街に高校生の店を開店させた。商業高校で学んだことを実践するだけでなく、目的を地域交流・社会貢献とした。主力商品の駄菓子を販売するだけでなく、商店街の活性化、地域のイベントに出かけての交流、老人介護施設や小学校学童保育、子供会などへの出張販売、お菓子パックの注文など、販売を通して社会に役に立つことを考えている。生徒たちにアフリカの様子、エイズの実態、尾崎さんの活動などを話し、店舗内にフェアトレードコーナーを設けることになった。また、アフリカから仕入れたビーズブレスレットに利益を加え、その利益でHTC センター（当時はVCT センターと呼んでいた）を建てることも決定した。

【資料1】マラウィ支援の新聞記事

4. 実践

2006年、夏休みが開けた2学期から実践を開始。

【資料2】実践シート

店舗会議。マラウィの体験を写真などで紹介。ブレスレットを見せて、フェアトレードの話をし、みんなで検討した。全員一致でマラウィのビーズブレスレットの販売が承認された。フェアトレードの考え方、吉商本舗としての取り組みを考える。

DVD「エイズとたたかう子どもたち」を見て、マラウィをはじめとするアフリカの、エイズ被害の現状を知ってもらった。尾崎さんからの手紙を紹介し、尾崎さんの気持ちが直接生徒たちに伝わるよう心がけた。

【資料3】尾崎さんからのメール

ブレスレット販売をするにあたり、マラウィから仕入れた金額に利益を上乗せし、その利益を積み立てて HTC センターを建設することも決まった。まず始めに、吉原商業高校の文化祭である南稜祭で、マラウィの紹介とブレスレットの販売を行うことにした。マラウィのエイズ被害の様子を調べ模造紙で紹介、教師海外研修のメンバーで集めて作った「マラウィ BOX」を展示、DVD の放映、そしてビーズブレスレットの販売など。また、この日に合わせてポスターも作成し、継続した活動为目标に取り組みを始めた。

【資料4】南稜祭の様子

5. HTC センターを建設

活動を始めてからすぐに、ソロプチミスト富士と吉原ロータリークラブから寄付の申し出があった。ブレスレットは好調に売れていたが、利益は少なく、目標額まではかなりの期間を覚悟していた。一緒にマラウィに行った先生方からも、クラスでアルミ缶を集めて作ったお金や、海外支援のために積み立てていたお金を使って欲しいとの申し出もあった。マラウィと一緒に行った原先生は長野県の赤穂東小学校のクラスで、吉商本舗の建設資金集めの話しをしてくださった。しばらくして、クラスみんなで決めたという資金提供の手紙とお金が届いた。部長もすぐお礼の手紙を送った。建設資金が集まるまでには、小学生と高校生の心温まる交流の他にも、人の温かさを感じるエピソードがたくさん生まれた。そして、わずか半年たらずで目標額を達成することができた。さっそく尾崎さんに連絡をとった。2007年3月、JICA 中部にて、マラウィ JICA 事務所との TV 会議を行うことになった。クラスの積立金を寄付してくれた長野県の原先生も、赤穂東小学校6年1組の児童と共に、JICA 駒ヶ根から参加することになった。マラウィからも、駒ヶ根からも、そして名古屋からも感謝の言葉が飛び交う感動的な会議だった。席上、吉原商業高校商業ビジネス部部長からマラウィに向けて、建設資金の贈呈が行われた。テレビでも分かるようにと、大きな祝儀袋を用紙し、笑いを誘っていた。

【資料5】JICA 中部 TV 会議の記事

【資料6】赤穂東小学校からの手紙と赤穂東小学校6年1組へのお礼の手紙

6. 吉原商業高校とマラウィがつながった

建設資金がマラウィに届くとのことで、マラウィでは資材の購入が始まった。建設資金は材料費だけで、建設するのはルウェレジカックを中心としたボランティアのメンバーである。4月11日建設開始。完成目標は尾崎さんの任期が切れる6月いっぱい。アフリカ人は時間を守らない、働かない、というイメージがあった。実際にマラウィに行って、協力隊の方たちから「マラウィ時間」という言葉を聞いていた。後日、吉商本舗を訪れた尾崎さんから、生徒たちに建設の裏話として笑い話（現場ではかなり必死だったようだが）をしてくれた。ルウェレジの人たちも本当によく頑張ってくれて、無事6月29日に完成し、翌30日にはオープニングセレモニーを行うことができた。

【資料7】 HTC センター建設写真

当日はよく晴れ渡った素晴らしい天気となり、現地の方も喜んで集い合つてとても盛大なセレモニーとなった。尾崎さんが教えたよさこい踊り（尾崎さんは高知県出身）のあと、尾崎さんの感謝の言葉や、JICA マラウィ事務所の諸永次長（当時）のスピーチへと続いた。スピーチの中で、吉商本舗からのメッセージも読んでいただいた。

【資料8】 オープニングセレモニーの様子

【資料9】 商業ビジネス部からのメッセージ

【資料10】 諸永次長のスピーチ原稿（英文）

7月3日、完成を受けて吉原商業高校とマラウィを結んでのTV会議が行われた。インターネットとJICAネットを使つての初めての試みだとのこと。マラウィー東京ー吉原商業と経由して映像と音声繋げるのだそう。マラウィは朝9時、吉原商業高校は夕方4時。回線トラブルもあり1時間待つて会議が始まった。マラウィからはルウェレジ中等学校のムテンデ君、ケビン君が参加。初めて首都に上がってきたので、昨日はあまり眠れなかったらしい。尾崎さんは、HTC センター完成までの様子を写真で紹介してくれた。ルウェレジカックメンバーから感謝の言葉があり、その後、ムテンデ君、ケビン君から商業ビジネス部メンバーへ質問。「どんな食べ物が好きですか」「友達とどんな遊びをしますか」など素直な質問に生徒たちも一生懸命答えていた。商業ビジネス部部长からお礼の言葉があり、最後に部員全員でマラウィ国歌を英語で合唱した。この日のために、マラウィで必死に覚えた国歌を部員全員に教え、毎日練習してきた。画面の向こうでムテンデ君とケビン君も胸に手を当て一緒に口ずさんでいたのが印象的だった。入部して間もない1年生も、先輩たちの後ろで一生懸命歌っていた。その1年生も現在は3年生となり、マラウィ支援を引き継ぎ、後輩たちへも伝えている。

【資料11】 TV 会議 写真と新聞記事

7. 支援の継続と広がり

HTC センター完成後、尾崎さんは任期を終えて帰国した。夏休み、尾崎さんと、ちょうど帰国していた諸永次長が吉商本舗を訪れた。TV 会議に参加した生徒たちと感動の対面をした。また、この日はマラウィ教師海外研修に参加した10名のうち6名が吉商本舗に来店し、吉商本舗の生徒と感動の出会いをし、尾崎さんたちとは懐かしい再会をした。

【資料12】尾崎さん、諸永次長と生徒たち

尾崎さんの任期終了を受けて、そのあと赴任したのが田中隊員である。田中さんも、尾崎さんと同じように、JICA 事務所の協力を受けながら、吉商本舗へプレスレットを送ってくれた。今年、建設から2年間経ったセンターの様子を、報告書にまとめて送ってくれた。センターが多くのマラウィの人たちの役に立っていることなど、生徒たちは自分たちの活動の成果を知ることができている。

【資料13】田中隊員からの報告（一部）

販売を開始してから、様々な人や団体との交流の輪が次々と広がり、出展要請、販売要請など、マラウィのプレスレットを紹介する場面が広がった。尾崎さんが講演された高知大学サークルや、学校文化祭で販売したいという沼津東高校からの希望があり、プレスレットを提供した。また、静岡県立大学での国際協力のイベントに出展し、活動を紹介したりプレスレットを販売したりした。

吉商本舗のフェアトレードも拡大した。ベトナムに行く機会を得た本校生徒（吉原ライオンズクラブからの企画）の中に部員も2名参加。ベトナムで、青年海外協力隊員から、フェアトレード商品を紹介され、マラウィと同じ方法で現地の小学生が作ったビーズアクセサリーを仕入れることにした。これは、ベトナム、フエ市の水上生活者の子どもたちを支援する活動となった。こちらの商品は、富士市内の広見小学校と交流。5年生のクラスの児童が、吉商本舗で販売を体験し、フェアトレード商品の袋詰め作業を行った。さらにクラスでお店を出して販売する、という活動にまで広がった。

【資料14】活動の広がり

8. おわりに

田中隊員もこの夏、任期を終えて帰国した。夏休み、田中さんは一人の男性を連れて吉商本舗を訪れた。林さんというその男性は、10月からマラウィに派遣される青年海外協力隊員だった。田中さんと林さんは、本舗の生徒とマラウィの高校生たちの様子や、今後の支援について語り合った。林さんは、田中さんの向こうでの支援を参考に、より良いビーズ製品が作れるよう本舗の高校生達に意見を聞いていた。今年、吉商本舗では、新商品として、オリジナルの飴を作って販売している。3つの味の飴を作ったのだが、そのうちの 하나가「マラウィ紅茶味」である。フェアトレードの紅茶を購入し、それを飴に練り込んだ。その飴を二人にお土産として渡した。二人ともとても喜んでくれたが、特に田中さんは、マラウィの子どもたちのことを思い出したらしく、涙を浮かべて感動してくれた。

その姿を見て、「本当に活動してきて良かった」と、部長がしみじみと話していた。自分たちの活動によって、人に感動を与えることができる。人のため、社会のために少しでも協力できる。高校生の店を中心に、これからもこのような活動の輪を広げていきたい。吉商本舗はこれからもマラウイのエイズ孤児を支援していきます。